

高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果

相 川 充

教育心理学*

(2006年9月29日受理)

問題と目的

近年、修学旅行先に海外を選ぶ高校が増えている。私立高校ばかりでなく、公立高校でも実施されている¹⁾。行く先は、韓国や中国などの隣国が多いが、近年は東南アジア(マレーシア、シンガポール)、オセアニア(オーストラリア、ニュージーランド)への修学旅行も増えている。また、旅行日数は、4、5日が最も一般的で、多くの学校が第2学年の秋に実施している(財団法人全国修学旅行協会、2000)。

このように高校生の海外修学旅行が増えているが、修学旅行に参加した高校生には、どのような心理的变化がもたらされるのであろうか。

海外修学旅行は青年期における短期の異文化体験であると考えられる。青年期はアイデンティティの拡散と統合の時期(Erikson, 1959)であり、この時期に、文化的アイデンティティも形成される(たとえば「自分は日本人だ」という認識とその受容)。そのような時期にある高校生が、短期異文化体験である海外修学旅行に行くことは、訪問国やその国の人びとに対するイメージ、さらには国際理解に多少なりとも影響を及ぼすと考えられる。海外修学旅行が生徒の心理的側面に及ぼす効果を調べることによって、従来の海外修学旅行のマイナス面を抑え、積極的な効果が期待できる海外修学旅行のプログラムを提案することにつながると考えられる。

カルチャー・ショックは一般に否定的な意味合いで用いられる概念であるが、Adler(1975)は、この概念を肯定的な意味合いでとらえ直した(北本, 1989)うえて、カルチャー・ショックの経験を次の5つの位相にわけて説明している。①接触: 文化的差異が好奇心をそそり、陽気で発見に富むが認知対象は都合のいいように選り分けられる。②崩壊: 文化的差異は圧倒的になり、選り分けようもなく迫り、混乱、戸惑いのなかで引きこもり

がちになる。③再統合: 文化的差異を認めようとせず、怒りやフラストレーションのなかで排他的で独断的になる。④自律: 文化的差異と共通点を正当と認め、リラックス状態の中で自信がわいてくる。⑤独立: 文化的差異と共通点を評価して、意味づけをおこない、豊かな感情のなかで自己実現的となる。

この区別に従うなら、修学旅行のような短期間の異文化体験では、①の「接触」期のうちに帰国することが多いのではないかと推測される。効果があっても限定的、表面的なのではないだろうか?

このような疑問に対して、例えば黒川・鈴木(2000)は、高校在学中の中国修学旅行の経験を振り返り、修学旅行で中国人と交流し、中国人も、多少の考え方の違いこそあれ日本人と同じだという感想を持ったと述べている。また、今井(1988)は、神戸YMCA主催のタイ・ワーク・キャンプに参加した日本の学生が、異文化に対する深い興味と奉仕の熱意を高め、参加後に、アジアを考えるグループを作ったり、NGO機関の専門スタッフになったりする者が現れたと述べている。

しかし、この種の研究は、参加者のどのような側面に、どのような効果が、どの程度もたらされたのかについて実証的、数量的に検証しているとは言い難い。

実証的、数量的に検証している研究に、北川の一連の研究がある。北川(1989)は、女子短大生のアメリカでの3週間のホームステイ経験が及ぼす心理的効果を、不参加の学生を対照群として出発前と帰国後の2回にわたる質問紙調査で検討した。そして、ホームステイは、アメリカ人やアフリカ系アメリカ人に対するイメージの変化に効果があったが、国際問題に対する認識などへの影響力は十分とは言えないという結果を見いだした。北川・箕浦(1990)は、高校生のアメリカでのホームステイ経験について、不参加の学生を対照群として

* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

出発前と帰国後の2回にわたる質問紙調査で検討した。その結果、ホームステイ群において、アメリカ白人に対する態度が、友好的、好意的、肯定的な方向に変化し、国際結婚への態度が地球市民的な意見の方向に変化していたが、アフリカ系アメリカ人に対するイメージには変化の度合いが少なかった。このことから、態度の変化は、体験の範囲を超えて普遍化するのには難しく、限定的で表面的な変化にすぎない可能性があるとして述べている。さらに北川・箕浦(1991)は、高校生のアメリカでの4週間のホームステイ経験について、前年と同様の質問紙調査を実施した。ホームステイ群は不参加群に比べて、「海外情報への関心・意見交換」、「性格の自己認識」「日本人意識」「外国人への接近・受容の態度」「外国人ホームステイへの受容的態度」「国際問題への認識・意見」「DIT(道徳性判断を見るための質問紙)」のいずれにおいても、肯定的、積極的な傾向があった。この結果は、ホームステイの事前準備約1ヶ月の体験が大きな影響を与えたと解釈されている。

これら3つの研究から、短期の異文化体験でも、国際的な問題に関する認識レベルの変化は明確ではないものの、情緒や態度のレベルでは肯定的な変化を起こす効果があると言えそうである。しかし、これは、アメリカという異文化に限られたことかもしれない、アジア諸国での異文化体験ではどうなのかは、はっきりしない。また、これら3つの研究はいずれも、ホームステイの効果を検証したものである。ホームステイは訪問国の文化の中で生活するため、異文化体験のインパクトはかなり強いものがある。修学旅行でも同じ効果があるのか定かではない。

海外修学旅行の効果を心理学の立場から検討した数少ない研究の1つに、御堂岡(1982)の研究がある。彼は、Zajonc(1968)の「単純接触効果」の理論をもとに、「修学旅行で直接接触を経験することによって、知識・関心は増大し、態度は好意的になり、イメージもよくなるだろう」という仮説を立て、これを検証するために、韓国への修学旅行の生徒と不参加の生徒を対象に、旅行前後2回の質問紙調査を実施した。その結果、修学旅行に参加した生徒は、韓国についての知識・関心が増大し、態度は好意的になり、対韓イメージは良くなる傾向を見出した。

川上(1982)は、御堂岡(1982)の研究においてみられた好意的な態度変化が持続するか検討するために、1年後に同じ対象者の追跡調査を行った。その結果、直接接触によって高まった韓国に対する関心はある程度持続することを見いだした。

このように従来の研究では、海外修学旅行が高校生に与える心理的効果について肯定的な結果を示してい

る。しかし、実証的な研究の数が少ないのが現状である。また、山岸(1992)が指摘しているように、従来の研究には、海外修学旅行やホームステイの体験内容と、それがもたらす効果の関係を直接調べたものはない。御堂岡(1982)の研究でも、修学旅行のどのような経験が対韓イメージの良化に貢献したかについては明らかでない。体験の内容と効果の関連を理解するには、海外修学旅行のプログラム内容と旅程の記述が不可欠である。海外修学旅行が何を指し、どのような活動で構成されたプログラムなのかを明らかにして初めて、海外修学旅行という異文化体験の効果が見えてくる。

以上のことから本研究では、御堂岡(1982)の研究を参考にしながら、海外修学旅行に行く高校生と不参加の高校生を対象として、旅行前後の変化を検討することによって、海外修学旅行が高校生の心理的側面に与える影響を検討することにした。具体的には、訪問国および訪問国の人に対する生徒のイメージ、および、訪問国を越えて外国一般に関する認識・関心・態度(国際理解度)の変化を検討する。また、御堂岡(1982)ではなかった、修学旅行のプログラム内容と、国際理解の変化の関連について検討する。

本研究では次の2つの作業仮説と1つのリサーチクエスチョンを立てた。

作業仮説1: 海外修学旅行で訪問国に行くことによって、訪問国とその国の人に対するイメージは好転するであろう。

作業仮説2: 海外修学旅行で訪問国に行くことによって、外国一般に関する認識・関心・態度(国際理解度)が高まるであろう。

リサーチクエスチョン: 海外修学旅行のどのプログラム内容が、国際理解に変化をもたらすのであろうか?

方法

1. **調査対象者:** 静岡県立浜松商業高等学校2年生のうち、修学旅行先がシンガポールの国際経済科120名(以後、「参加群」と呼ぶ)、修学旅行先が九州である情報処理科122名(以後「不参加群」と呼ぶ)計242名。

2. **修学旅行の概要**(同校が発行した「海外研修のしおり」より)

「海外研修の目的」は、「1.シンガポールの経済・歴史について学習し、自国について客観的に見る目を養う」「2.海外研修を体験して、相互理解と友好交流の大切さを知る」「3.研修を通して学習することの大切さを理解し、今後の学習意欲の向上を図る」である。

「クラス別研修」としては、戦争記念碑への献花、

インド人街やアラブ人街や中国人街の散策および寺院やモスクの見学、マライオン公園や植物園の見学が組まれている。

「グループ研修」としては、3人～10人グループに分かれ、各種の公共交通機関（ケーブルカー、モノレール、バス、地下鉄）を使ってセントーサ島もしくはオーチャード地区、シティー地区を散策することが組まれている。

修学旅行の大まかな日程と内容は表1に示したとおりである。

3. 手続き：各学級担任教師が、修学旅行の前後のホームルームの時間に、参加群と不参加群の生徒に、「高校生の意見を聞くアンケート」と称した質問紙を一齐に実施した。
4. 調査時期：1回目は2001年11月16日、2回目は同年12月5日。
5. 質問紙の構成：旅行前の質問紙は、参加群、不参加群両者に共通の質問紙で、問Ⅰ「シンガポールの国のイメージ」、問Ⅱ「シンガポール人のイメージ」と、問Ⅲ「国際理解の程度を調べる質問」の三部から構成された。

問Ⅰ、問Ⅱでは、イメージを測定するためにSD法を用いた。SD法の形容詞対は、御堂岡（1982）が修学旅行前後の「韓国・韓国人のイメージ」を測るために使用した形容詞対と同じものを採用した（実際の項目は、

表2、表3を参照せよ）。質問文は「あなたはシンガポールという国に対して（問Ⅱでは「シンガポールの人に対して）」どのようなイメージをお持ちですか。次の様々な形容詞対ひとつひとつについて、「とても」「かなり」「やや」「どちらともいえない」の選択肢の中から最も近いと思うところに○をつけてください」であった。尺度は、「どちらともいえない」を中心に左右に「やや」「かなり」「とても」と評語が付いている両極性尺度を用い、7段階で評定させた。

問Ⅲの国際理解の程度を調べる尺度は「国際理解測定尺度：IUS2000」（鈴木・坂元・森津・坂元・高比良・足立・勝谷・小林・樫淵・木村、2000）を利用した。この尺度は6因子、72項目で構成されているが、各因子より因子負荷量の高い順に6項目ずつ、計36項目（うち13項目は逆転項目）を選んで使用した。6因子のうち「他国民・他民族に対する感情」因子は、「多くの外国人と友達になりたいと思う」「どの国の人も仲よくしたいと思う」「外国人と仲よくすることは抵抗感がある（逆転項目）」などの項目から成る。「平等意識」因子は「貧しい国の人ならば、意見が軽視されることがあってもやむをえない（逆転項目）」「どの国の出身かによって、友達を選んではいけないと思う」「生まれた国や人種によって、待遇が異なるのはおかしいと思う」などの項目から成る。「他国文化の理解」因子は「海外に行ったら、地元の人の習慣に触れたいと思う」「外国の伝統

表1：修学旅行の日程と内容

日次	月日	都市名	交通機関	摘要
1	11/28	学校 名古屋空港 チャンギ空港 ANAホテル	貸切バス 飛行機	バスにて名古屋空港へ 出国手続き 入国手続き ホテルチェックイン 講演（トーマス氏）、夕食（ビュフェ式） ANAホテル泊
2	11/29	シンガポール	貸切バス ボート	ホテルにて朝食 午前：クラス別シンガポール市内研修 昼食（コピティアムにて自由食） 午後：グループ研修 夕食（オリエントオーシャン） シンガポール川のクルーズ ANAホテル泊
3	11/30	シンガポール チャンギ空港	貸切バス 飛行機	ホテルにて朝食 午前：現地学生と交流をしながらセントーサ島を研修 現地学生と昼食会（リバーイン） 午後：セントーサ島をグループ毎に研修 夕食（クビライカーン） 食後、ナイトサファリ研修 出国手続き 機中泊
4	12/1	名古屋空港 学校	貸切バス	機内にて朝食 入国手続き バスにて学校へ

文化を紹介するような番組は見ないほうである(逆転項目)」「各国に見られる独自の習慣を尊重したい」などの項目から成る。「人類の共通課題への関心」因子は「地球の砂漠化現象のメカニズムを理解したい」「飢餓に苦しんでいる人たちのために何が出来るか考えることがある」「世界平和の維持に関心がない(逆転項目)」などの項目から成る。「国際的協力機構への協力的態度」因子は「世界平和の維持に努めている機関を支援したい」「国際的なボランティア団体の活動内容に興味はない(逆転項目)」「世界の自然を守るために活動している国際機関を支援したい」などの項目から成る。「外国語の理解」因子は「日常会話程度ならば、英語などの外国語を話すことができる」「英語などの外国語で話しかけられると、何を言われたのか理解できない(逆転項目)」「自分の言いたいことを英語などの外国語で表現できる」などの項目から成る。これらの項目それぞれに対して、「次の質問文を読んで、あなた自身にどの程度あてはまるかお答えください。「全くあてはまらない1」「あまりあてはまらない2」「ややあてはまる3」「とてもあてはまる4」の中からひとつ番号を選び○をつけてください」と尋ね、4段階で評定させた。

旅行後の質問紙は、旅行前の質問紙と同じ問I、問II、問IIIを参加群と不参加群に実施し、参加群の質問紙にのみ、問IV「国際理解の程度と修学旅行のプログラムの関係を調べる質問」を記載した。これは次のように作成し、実施した。

まず、上記の「国際理解測定尺度」の6因子の内容を表すと思われる6つの質問項目を作った。因子の順に、「いろいろの国の人たちと仲良くなりたい」、「人間はみな平等であるべきだ」、「いろいろな国の文化について知

りたい」、「地球規模の問題(人口・環境問題など)について知りたい」、「国際的問題を解決している機関を支援していきたい」、「外国語を学びたい」の6項目である。この質問項目に関して「今回のシンガポールへの修学旅行を振り返って、次の(1)～(6)にあげたことについて、あなたの気持ちにどの程度当てはまりますか」と尋ね、あてはまる程度を、「全くあてはまらない1」「あまりあてはまらない2」「ややあてはまる3」「とてもあてはまる4」の4段階で評定させた。

次に、「そのように思うきっかけとなった出来事を四角の中から1つ選び○をつけてください」と尋ねた。四角の枠の中には、修学旅行のプログラムに合わせて次の10項目の選択肢を用意した。「①空港や飛行機の中」「②ホテルでの滞在中」「③講演」「④クラス別研修」「⑤グループ研修」「⑥現地学生との交流」「⑦川のクルーズ」「⑧ナイトサファリ」「⑨その他」「⑩旅行中になし」。

結果

修学旅行前後2回の調査に完全に回答した220名を分析の対象とした。そのうち参加群は103名(男61名、女42名)、不参加群は117名(男36名、女81名)であった。

1. シンガポールという「国」に対するイメージ

表2は、シンガポールという「国」に対するイメージが、「参加群」「不参加群」において旅行の前後でどのように変化したかを示したものである。SD尺度得点の平均値と、旅行後マイナス旅行前の差について検定した結果を示している。

表2の検定結果を見て分かるように、不参加群では、旅行前と旅行後のシンガポールという「国」に対するイメージにほとんど変化がなかった。有意な変化があった

表2：シンガポール「国」のイメージ 平均値とt検定の結果

SD 尺度項目	両群の各期の平均値				差の検定結果	
	不参加群		参加群		旅行後マイナス旅行前	
	旅行前	旅行後	旅行前	旅行後	不参加群	参加群
好戦的－平和的	4.50	4.96	5.50	5.71	.47**	.21
現実主義的－理想主義的	3.94	3.95	4.01	4.19	.01	.18
女性的－男性的	4.06	4.17	4.03	3.77	.11	-.26
閉鎖的－開放的	4.26	4.24	3.76	4.61	-.03	.85**
まとまりが悪い－まとまりがよい	4.21	4.28	4.84	4.82	.07	-.02
信用できない－信用できる	3.88	3.89	4.37	4.42	.01	.05
暗い－明るい	4.53	4.59	4.66	5.20	.06	.54**
追従的－自主的	4.11	4.36	4.30	4.78	.25**	.48**
遅い－速い	4.24	4.10	4.23	4.49	-.14	.26
きたない－きれい	4.99	5.16	6.28	5.56	.17	-.72**
年老いた－若い	4.19	4.36	4.51	4.98	.17	.47**
独裁的－民主的	4.40	4.50	4.59	4.80	.09	.20
沈滞した－活気に満ちた	4.45	4.62	4.78	5.30	.17**	.52**
親しみにくい－親しみやすい	4.10	4.30	4.39	5.01	.20	.63**

t 検定の結果 ** p < .01

のは、「好戦的－平和的」(t=5.12)、「追隨的－自主的」(t=2.76)、「沈滞した－活気に満ちた」(t=1.89)の3項目のみであった(すべてdf=116, p<.01)。いずれも「平和的」「自主的」「活気に満ちた」という肯定的方向に変化していた。

これに対して参加群は、旅行後にシンガポールという「国」に対するイメージが7項目において有意に変化していた。有意な変化があったのは、「閉鎖的－開放的」(t=4.99)、「暗い－明るい」(t=4.19)、「追隨的－自主的」(t=4.16)、「きたない－きれい」(t=4.65)、「年老いた－若い」(t=3.33)、「沈滞した－活気に満ちた」(t=3.56)、「親しみにくい－親しみやすい」(t=4.06)の7項目であった(すべてdf=102, p<.01)。変化の方向は、6項目において「開放的」「明るい」「自主的」「若い」「活気に満ちた」「親しみやすい」と、肯定的方向に変化していたが、1項目のみ旅行後に「きたない」という否定的方向に変化していた。

2. シンガポール「人」に対するイメージ

表3は、シンガポール「人」に対するイメージが、「参加群」「不参加群」において旅行の前後でどのように変化したかを示したものである。表2と同様、SD尺度得点の平均値と、旅行後マイナス旅行前の差について検定した結果を示している。

表3の検定結果を見て分かるように、不参加群では、旅行前と旅行後のシンガポール「人」に対するイメージは、「不道徳的－道徳的」(t=2.07,df=116,p<.01)の1項目のみで「道徳的」な方向へ変化していた。不参加群では、旅行前後でシンガポール「人」のイメージにほとんど変化がなかったといえる。

これに対して参加群は、「怠惰－勤勉」(t=6.37)、「閉

鎖的－開放的」(t=4.14)、「きたない－きれい」(t=3.18)、「内気－社交的」(t=4.21)、「親しみにくい－親しみやすい」(t=4.85)、「不親切－親切」(t=4.64)の6項目で有意な変化が認められた(すべてdf=102, p<.01)。変化の方向は、5項目において「勤勉」「開放的」「社交的」「親しみやすい」「親切」と肯定的方向に変化していたが、1項目だけ「きたない」という否定的方向に変化していた。

3. 国際理解の変化

表4は、不参加群、参加群それぞれにおいて、旅行の前後で、国際理解がどのように変化したかを示したものである。6つの因子ごとに、また、6つの因子を合計した値から成る「国際理解度」の平均値を示している。

これら7種類の平均値に関して、各因子ごとに、「参加・不参加」×「旅行前・後」の2要因の混合型分散分析を行った。その結果、「他国民・他民族に対する感情」(F=4.23, p<.05)、「平等意識」(F=8.10, p<.01)、「外国語の理解」(F=9.18, p<.01)の3つの因子において有意な交互作用が認められた(いずれもdf=1/218。なお「他国民・他民族に対する感情」「外国語の理解」はともに、「参加・不参加」の主効果も有意であったが、本研究においては主効果は意味をなさないのと言及しない)。交互作用が認められたこの3つの因子の平均値に関して、多重比較を行った。

その結果、「他国民・他民族に対する感情」に関しては、旅行前においては不参加群と参加群に有意な差がなかったが、旅行後において、不参加群にはほとんど変化が見られなかったのに対して、参加群の値が高まったことから、両群に有意な差(p<.05)が生じたことが分かった。

表3：シンガポール「人」のイメージ 平均値とt検定の結果

SD 尺度項目	両群の各期の平均値				差の検定結果	
	不参加群		参加群		旅行後マイナス旅行前	
	旅行前	旅行後	旅行前	旅行後	不参加	参加
模倣的－独創的	4.05	4.04	4.17	4.21	-.01	.05
好戦的－平和的	4.61	4.61	5.17	5.34	.00	.17
不道徳的－道徳的	4.45	4.63	4.98	4.91	.18**	-.07
閉鎖的－開放的	4.43	4.26	4.18	4.81	-.16	.62**
信用できない－信用できる	3.94	3.97	4.11	4.41	.03	.31
冷たい－暖かい	4.62	4.63	4.98	5.21	.01	.23
遅い－速い	4.24	4.22	4.17	4.22	-.02	.05
集団主義的－個人主義的	3.85	3.97	4.10	4.17	.12	.07
きたない－きれい	4.49	4.61	5.48	5.01	.12	-.47**
内気－社交的	4.54	4.39	4.50	4.99	-.15	.49**
非民主的－民主的	4.38	4.51	4.63	4.71	.13	.08
親しみにくい－親しみやすい	4.13	4.22	4.31	4.97	.10	.66**
不親切－親切	4.50	4.55	4.56	5.17	.04	.61**

t 検定の結果 ** p < .01

表4 国際理解 各因子ごとの平均値

因子	両群の旅行前後の平均値			
	不参加群		参加群	
	前	後	前	後
1. 他国民・他民族に対する感情 *	16.46	16.33	17.41	17.96
2. 平等意識 *	18.44	17.94	17.99	18.52
3. 他国文化の理解	16.16	16.26	16.44	16.87
4. 人類の共通課題への関心・認識	15.83	15.69	15.53	15.69
5. 国際的協力機構への協力的態度	16.20	16.48	16.57	16.55
6. 外国語の理解 *	11.31	12.01	13.15	12.64
7. 国際理解度 (6 因子合計)	94.40	94.70	97.08	98.24

*分散分析の交互作用が有意であった因子

表5 国際理解の「内容」と旅行プログラム中の「きっかけ」の関係 (%)

内容	きっかけ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	分母の人数
		空港や飛行機の中	ホテルでの滞在中	講演	クラス別研修	グループ研修	現地学生との交流	川のクルーズ	ナイトサファリ	その他	旅行中になし	不明	
(1) いろいろな国の人たちと仲良くなりたい		2	0	4	1	12	59	0	0	2	7	12	83名
(2) 人はみな平等であるべきだ		5	5	13	10	8	5	0	1	2	45	7	92名
(3) いろいろな国の文化について知りたい		0	3	22	37	9	7	0	1	0	13	12	76名
(4) 地球規模の問題について知りたい		0	0	38	2	2	2	9	13	0	30	4	47名
(5) 国際問題を解決している機関を支援していきたい		0	0	13	4	0	4	2	2	0	67	8	52名
(6) 外国語を学びたい		6	0	0	0	21	48	0	0	2	12	11	84名

「平等意識」に関しては、旅行前も旅行後も、不参加群と参加群の間に有意な差はないが、参加群のみ、旅行前よりも旅行後に平等意識が有意に高まっていた ($p<.01$)。

「外国語の理解」に関しては、旅行前の不参加群と参加群、旅行後の不参加群と参加群の間に有意な差 ($p<.01$) があった。ただし、参加群はむしろ旅行後に値が下がる傾向にあった。

4. 修学旅行のプログラムと国際理解の変化との関係

修学旅行のプログラムと国際理解の変化がどのように関係しているのかみるために、国際理解測定尺度中の各因子の内容を表す6つの質問文を作り、その内容に修学旅行後の自分自身の気持ちがどれくらいあてはまるかを4段階で答えさせた。その回答のうち、「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」を1つにまとめて「あてはまる」群、「あまりあてはまらない」と「全くあてはまらない」を1つにまとめて「あてはまらない」群とした。6つの質問文ごとに、両群の人数を参加群103名で除して、その割合 (%) を求めた。

その結果、「あてはまる」群の割合は、「(1) いろいろな国の人たちと仲良くなりたい」81%、「(2) 人はみな

平等であるべきだ」89%、「(3) いろいろな国の文化について知りたい」74%、「(6) 外国語を学びたい」82%と高い割合を示した。これに対して、「(4) 地球規模の問題について知りたい」46%、「(5) 国際問題を解決している機関を支援していきたい」50%と、約半数しかいなかった。

これらの「あてはまる」群の人たちにのみ、そう思ったきっかけを修学旅行のプログラム①～⑩のうちから選ばせた。その結果を、パーセンテージに変換して国際理解の6つの内容ごとにまとめたのが、表5である。

表5の割合 (%) のうち、10%以上の者が「きっかけ」に挙げたものを順に列挙すると、以下ようになる。

「(1) いろいろな国の人たちと仲良くなりたい」と思ったきっかけは、「⑥現地学生との交流」(59%)、「⑤グループ研修」(12%)であった。

「(2) 人はみな平等であるべきだ」と思ったきっかけは、「⑩修学旅行中になし」(45%)、「③講演」(13%)、「④クラス別研修」(10%)だった。

「(3) いろいろな国の文化について知りたい」と思ったきっかけは、「④クラス別研修」(37%)、「③講演」(22%)、「⑩旅行中になし」(13%)であった。

「(4) 地球規模の問題について知りたい」と思ったきっかけは、「③講演」(38%)、「⑩旅行中になし」(30%)、「⑧ナイトサファリ」(13%)であった。

「(5) 国際問題を解決している機関を支援していきたい」と思ったきっかけは、「⑩旅行中になし」(67%)、「③講演」(13%)であった。

「(6) 外国語を学びたい」と思ったきっかけは、「⑥現地学生との交流」(48%)、「⑤グループ研修」(21%)、「⑩旅行中になし」(12%)であった。

質問紙であらかじめ用意した選択肢のうち、「①空港や飛行機の中」「②ホテルでの滞在中」「⑦川のクルーズ」は、きっかけとしてはほとんど選ばれなかった(選ばれても10%未満)。また、「⑩旅行中になし」は、6つの内容のうち「(1) いろいろな国の人たちと仲良くなりたい」以外の5つで選択されていた。

考 察

1. 訪問国とその国の人に対するイメージの変化

本研究では、海外修学旅行で訪問国に行くことによって、訪問国とその国の人に対する高校生のイメージが好転するという仮説(作業仮説1)を立てた。

シンガポールという「国」に対するイメージは、シンガポールへ行かなかった不参加群においてはほとんど変化が見られなかった。「好戦的-平和的」、「追従的-自主的」、「沈滞した-活気に満ちた」の3項目には有意な変化があったが、これは不参加群の高校生が1ヶ月弱の2回の調査の間に、テレビ視聴、新聞、読書などによって何らかの学習をしたか、あるいは偶発的な変化だと考えられる。

これに対して、シンガポールに出かけた参加群は、7項目において有意な変化があった。修学旅行に行ってきたことで、シンガポールに対して、開放的、明るい、自主的、若い、活気に満ちた、親しみやすい、という肯定的方向へのイメージの変化があった。

1項目のみ「きれい-きたない」は否定的方向に変化していたが、旅行前の平均値がもともと6.28と高く、マイナスの方向に変化したとはいえ、その平均値は5.56で「きれい」に近い。旅行前に「きれい」の平均値だけとびぬけて高かったのは、シンガポールが国を挙げて美化を推進していて、ゴミを捨てたりすると罰金を科せられる国として有名であるせいであろう。それが、実際に現地を訪れてみて、期待したほどではなかったと思ったために、マイナス方向に変化したのではないだろうか。

参加群において有意に変化しなかった項目をみると、「好戦的-平和的」「現実主義的-理想主義的」「女性的-男性的」「まとまりが悪い-まとまりがよい」「信用で

きない-信用できる」「遅い-速い」「独裁的-民主的」である。これらは政治や主義主張に関することが多い。短期間で観光がメインの修学旅行では、国家や政治に対するイメージは変化しにくいものと思われる。他方、短期間でも変化しやすいのは、気候や暮らし振りに対するイメージであることが伺える。

シンガポールの「人」に対するイメージは、不参加群においては旅行の前後で変化したのは1項目であったのに対して、参加群では6項目において有意な変化が認められた。このうち、「勤勉」「開放的」「社交的」「親しみやすい」「親切」の項目では肯定的方向に変化し、「きれい-きたない」の項目で否定的方向に変化していた。これは「国」のイメージ同様、旅行前の平均値がすでに5.48と他の項目に比べ極端にイメージが良く、旅行後にマイナスの方向に変化したといっても平均値は5.01と「きれい」に近い値にとどまっていた。従って、参加群の高校生は、シンガポールの人と直接触れあったことによってイメージが肯定的な方向に変化したと言えるだろう。

以上のことから、作業仮説1は支持されたと考えられる。

2. 国際理解の変化

本研究では、作業仮説2として、海外修学旅行で訪問国に行くことによって、外国一般に関する認識・関心・態度(国際理解度)が高まるであろうという仮説を立てた。

分析の結果、「他国民・他民族に対する感情」「平等意識」に関しては、不参加群よりも参加群に肯定的な変化が認められたが、「外国語の理解」に関して、旅行後に値が下がっていた。

「他国民・他民族に対する感情」において肯定的な変化が認められたことから、シンガポールへの修学旅行が、外国人に接触する時に感じるためらいや怖さを低減させ、その分、外国人に対する親しみを増加させ、異なる文化を持つ人と接触することへの興味をもたせるきっかけとなったと考えられる。また、「平等意識」も高まったことから、参加群の高校生は、自国の人と外国の人とを区別し外国人を差別するような自民族中心主義的な考え方から、人はみな平等であるという脱自民族中心主義的な考え方へ変わるきっかけをつかんだものと思われる。

しかし、「他国文化の理解」「人類共通課題への関心・認識」「国際的協力機構への協力的な態度」に関しては、参加群にも有意な変化は認められなかった。

「他国文化の理解」については、当初は、高校生達にとってシンガポールへの渡航は初めての経験であるこ

とから、外国文化への興味が増して、他国文化の理解の得点も上がると予想していたが、他国文化を“理解”するという事は、Adler (1975) の5段階説で言えば「④自律」以降の段階であろう。短期間の修学旅行では、Adler (1975) の第1段階「①接触」期のうちに帰国してしまうため、他国文化を“理解”するに至らなかったと考えられる。

「他国文化の理解」でさえ変化が起こらなかったのであるから、もっと抽象度の高い環境問題や南北問題などへの認識を測る項目で構成されている「人類共通課題への関心・認識」や、これらの問題解決をめざしている「国際的協力機構への協力的な態度」に変化が起こらなかったのはむしろ当然である。

修学旅行のような短期滞在では、具体的な訪問国や人に対するイメージを変化させることはできても、訪問国から敷衍された外国一般の文化への理解や人類共通課題への関心、国際協力機構の協力的態度を変化させることはできないのであろう。

なお、「外国語の理解」において、参加群が旅行後に得点が下がっていたのは、英語が公用語のシンガポールで英語がうまく通じない体験をしたのかもしれない。あるいは、この「外国語の理解」因子は、他の因子と違って、質問項目の末尾が6項目中5項目において「外国語を話すことができる」「何を言われたのか理解できない」「外国語で表現できる」「答えることができる」「新聞や雑誌が読める」と、「できる、できない」という能力を直接尋ねる項目で構成されていた(1項目のみ「外国語で書かれた新聞や雑誌には関心がない」と興味関心を尋ねている)。能力の自己評価だったゆえに、短期の修学旅行では変化が起こらなかったとも考えられる。

以上のことから、作業仮説2については、一部は支持されたものの明確な仮説の支持は得られなかったと言わなければならない。

3. 修学旅行のプログラムと国際理解の変化との関係

本研究では、2つの作業仮説に加えて、「海外修学旅行のどのプログラム内容が、国際理解に変化をもたらすのであろうか」というリサーチクエスチョンを設定した。この疑問を解くべく、参加群の中で、国際理解の内容を示す6つの質問文に「あてはまる」と答えた高校生が、そう思うようになったのは、修学旅行のプログラムのうちどの内容がきっかけであったか尋ねた。

その結果をみると、次のようなことが言えよう。

第1に、国際理解の6つの内容、それぞれに応じて、そう思うようになった修学旅行中のプログラムが異なっていた。例えば、「⑧ナイトサファリ」は、ほかの内容では選択されていないが、唯一「(4) 地球規模の問題

について知りたい」と思ったきっかけとしてだけ10%を超えて選択されていた。また、「⑤グループ研修」と「⑥現地学生との交流」は、「(1) いろいろな国の人たちと仲良くなりたい」と「(6) 外国語を学びたい」の2つのときだけ選択されていた。

第2に、国際理解を促した修学旅行中のプログラムの内容として、「講演」が大きな力を発揮していた(6つの国際理解の内容中4つで選択されていた)。

第3に、国際理解を促したきっかけが、修学旅行中のプログラムにはなかったと答えた割合が高かった(「⑩旅行中になし」は、6つの内容のうち5つで選択され、しかも67%や45%と高い割合を示していた)。

海外への修学旅行というと、どうしても現地での体験型プログラムが重視される傾向にあるが、現地での、現地の人による「講演」は、効果が大きいことが伺える。また、現地の人と交流する機会をできるだけ多くするためには「現地学生との交流」は有効である。特に修学旅行という短期間の異文化体験であれば、現地の人と自然に交流する機会は限られるからである。

やみくもに体験型プログラムを用意するのではなく、プログラムのどの部分で、高校生の国際理解のどのような側面を促進させるのか、あらかじめ十分に検討し、それを実現できるような計画の立案が必要であろう。

4. 総合的考察

外国の慣れない土地に行くことは、カルチャー・ショックと言われる心理的危機状態を引き起こすこともある。そのことを考えると、海外修学旅行が生徒に及ぼすマイナスの影響がはっきりしないままプログラムを実行することは危険である。その反面、外国に行き、文化的背景が異なる人々と直接、接することにより、世界の様々な事象に関心を持つきっかけになることも期待できる。

本研究の結果から言えることは、短期間の海外修学旅行では、イメージのような表層的なものは変化させることができるが、訪問国を超えて外国一般に対する興味、関心や国際理解の深まりなどの変化は、容易には起こらないということである。それでも、一部には肯定的な変化も認められたことから、修学旅行中のプログラムをいかに計画するかが大きなポイントになると思われる。

修学旅行のプログラムは、安全面からしても、また、限られた予算と時間からしても、観光地といわれる整備された場所を巡ることが主流となる。滞在もホテルであることから、その国に暮らす人々の生活レベルまで体験することは難しい。だからこそ、大人数でのバス観光だけでなく、できるだけ、班別研修や現地学生との交流な

ど、現地の人と直に触れあう機会を作る必要がある。それもただ単に交流をすればよいのではなく、「講演」などのように高校生に伝えたいことを明確に計画しておく必要がある。

旅行先の国や「人」のイメージが良くなれば、今後、訪問国の人と接するときに、それまでよりも良いイメージをもって接することができるだろう。そのことは、外国人や外国一般に対する友好的なイメージ、あるいは国際理解に広がる可能性を秘めている。北本（1990）も、現地での相手との交流の達成感、相手文化や物の考え方に対する好印象の存在といった要素を満たしていれば、非常に短期間の異文化体験でも、個人に変化を引き起こせると述べている。修学旅行中のプログラムを的確に組んで、短期間の異文化体験でも生徒の人的成長を促すことが求められる。

なお、本研究は、ひとつの高校の限られた対象者の海外修学旅行の効果进行分析したものである。限定的なデータから導きだされた結果であることは否めない。特に、質問紙調査を2回繰り返したことから、研究意図が回答者に伝わったと思われる。このことから、回答者が研究者の意図を察した回答をした「実験者効果」が生じた可能性も否定できない。あるいは回答者自身が「修学旅行は有意義だった」と過度に期待した上で、その期待に沿った回答をした可能性もあろう。いずれにしても、本研究の結果をみる際には、このような本研究の方法論上の限界を忘れてはならない。

注1) 平成10年度に海外修学旅行を実施した公立学校は324校（同年度の私立高校は413校）であったが、翌平成11年度は377校（前年比22%増）であり、これは、全国公立高校の約1割近い数字である（財団法人全国修学旅行協会、2000）。

引用文献

- Adler, P. S. 1975 The transitional experience : An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15, 13-23.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. (小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 誠信書房)
- 今井鎮雄 1988 青少年の活動にみる異文化体験理解 異文化間教育, 2, 49-57.
- 川上和久 1982 イメージ変化の持続性 辻村明ほか (編) 日本と韓国の文化摩擦-日韓コミュニケーションギャップの研究 (pp.56-65) 出光書店
- 北川歳昭 1989 意識の国際化に関する研究 (I) - 短大生のホームステイ経験が及ぼす心理的効果 - 中国

短期大学紀要, 20, 75-86.

- 北川歳昭・箕浦康子 1990 高校生の海外ホームステイ効果 (I) - アメリカ人と日本人のイメージの変化 - 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 34-35.
- 北川歳昭・箕浦康子 1991 高校生の海外ホームステイ効果 (III) - 態度・認識における変化 - 日本社会心理学会第33回大会発表論文集, 362-363.
- 北本晃治 1989 青年期における短期海外研修の意義と可能性 京都外国語大学研究論叢, 第XXXIV号, 44-55.
- 北本晃治 1990 青年期の発達課題と短期異文化体験 京都外国語大学研究論叢 第XXXVII号, 32-48.
- 黒川圭一・鈴木義治 2000 中国修学旅行における日中高校生の交流 歴史地理教育, 2000年1月号, 20-22.
- 御堂岡潔 1982 修学旅行によるイメージの変化 辻村明ほか (編) 日本と韓国の文化摩擦-日韓コミュニケーションギャップの研究 (pp.44-56) 出光書店
- 静岡県立浜松商業高等学校 2001 海外研修のしおり 静岡県立浜松商業高等学校
- 鈴木佳苗・坂元 章・森 津太子・坂元 桂・高比良美詠子・足立にれか・勝谷紀子・小林久美子・檀淵めぐみ・木村文香 2000 国際理解測定尺度 (IUS2000) の作成および信頼性・妥当性の検討 日本教育工学会論文誌, 23, 213-226.
- 山岸みどり 1992 異文化教育の評価の視点 現代のエスプリ, 299, 191-200.
- 財団法人全国修学旅行協会 2000 平成12年度全国都道府県・政令指定都市修学旅行基準概要調査 財団法人全国修学旅行協会
- Zajonc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monograph Supplement*, 9 (2), 1-27.

付 記

本研究は、石山恵未（東京学芸大学国際文化教育課程国際教育研究専攻2002年卒業）との共同作業によって実施された。

調査にご協力くださった静岡県立浜松商業高等学校の学校関係者の皆様ならびに生徒の皆様に、厚くお礼申し上げます。

高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果

The effect of a school trip abroad on high school students' image of the country where they visited and their international understanding

相 川 充

Atsushi AIKAWA

教育心理学*

要 旨

本研究は、高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に、肯定的な影響を及ぼすかどうかを統制群との比較を通じて検討したものである。調査対象者は県立商業高校2年生、修学旅行先がシンガポールの参加群120名、不参加群122名であった。両群に対して、修学旅行の前後2回、シンガポールの国と人に対するイメージ調査、国際理解の程度を調べる質問を実施した。その結果、シンガポールの国と人に対するイメージは、不参加群では、旅行前後でほとんど変化がなかったが、参加群は、旅行後に、用意したSD尺度項目の半分以上において有意な変化を示していた。また、国際理解度の変化を調べたところ、修学旅行前には参加群と不参加群に差がなかったが、旅行後には、参加群において有意な変化が認められた。このような結果を踏まえて、本研究では、海外の国や人に対する高校生のイメージや国際理解に肯定的な変化をもたらすような海外修学旅行のプログラムを構成する必要性が論じられた。

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)